

「耳も遠く、体はガタガタ。でも俺の居場所はリング」 心筋梗塞を病むも誇りに殉じた“伝説のレスラー”

映画・健康エッセイスト こもり 小守ケイ

「我らがヒーロー、ランディ・ザ・ラムと中東の獣、アヤトツラーの死闘!。「いよいよ“ラム・ジャム”だ! 決まった! 勝った!」。「1989年4月6日は、永遠にプロレス史に刻まれます」。

“ラム・ジャム”とは、コーナーの上に仁王立ちしたラムことランディが、マット上に倒れた相手の上に飛び降り、カウントを奪う勝利の決め技。そう、あの頃は栄光の日々だった…。

20年後、50代になった彼はトレーラーで独り暮らし。補聴器や老眼鏡は手放せないが、昔のブロマイドのまま筋骨隆々、金髪長髪の姿で、馴染みの子持ちストリッパー、キャシディを心の支えに、平日はスーパーのバイト、週末はドサ周りのプロレス興行でしのぐ生活だ。

ベネチア映画祭グランプリほか世界で54の映画賞受賞作。元プロボクサーの俳優ミッキー・ロークが、老いと孤独に直面した元人気プロレスラー、ランディの切ない姿を熱演し絶賛された。

「ステロイドさえ飲んでおけば…」

場末のプロレス会場。今夜も彼は打ち合せ通り、隠し持った剃刀の刃で自ら額を切って血を見せ、ファンが興奮した所で“ラム・ジャム”を決める。試合後、プロモーターから対アヤトツラー戦20周年記念“ラムVSアヤトツラーII”の試合を

提案される。「4月6日か。もうすぐだな」。

彼がプロレスを続けられるのも、控室で売人から買い込む大量の薬のお陰。処方も無く、怪

我や痛みには鎮痛剤や抗生剤、筋力強化にはステロイドや成長ホルモン…と大量の薬を飲み、尻にインスリンを打つ。

「今夜はステーブル・ガンを使おう」。大型ホッチキス針を打ち合い、大流血の乱闘を見せた試合。試合後、控室で激しい痛みや吐き気に襲われ、立ち上がるや胸を押さえて崩れ落ちた…。

人生をやり直そうと するも…

「心筋梗塞で死にかけた」。バイパス手術で命拾いはしたが、

プロレスは無理と宣告される。「常用の薬は止め、処方薬だけ飲むよう」。退院後、軽く走ってみるも、すぐに息は切れ、ふらつき、胸を押さえてしゃがみ込む。俺はラムだ! 気張っても心臓の不安は消えず、独り暮らしも辛くなる…。

手術から数週間、キャシディに会いにクラブへ。「こんな時こそ家族よ。娘さんは?」。古い手紙を頼りに大学生になった娘を探し出すも、「幼い私を捨てた。許さないわ」。しかし、キャシディに選んで貰った服を手に再び訪ねると、「土曜に食事? いいわ」と少し打ち解ける。

「プロレスから引退する」。娘やキャシディとの人生を夢見て、週末にもスーパーの仕事を入



発売元：日活株式会社 販売元：株式会社ハピネット
写真：上：左から娘、ランディ、キャシディ
下：試合中に痛みを堪えるランディ

映画「レスラー」

D・アロノフスキー監督、2008年、米

れた彼だが、運悪くコールガールにひっかかり、麻薬のせいで娘との約束をすっぽかしてしまう。「もう会わないわ。永遠に」。

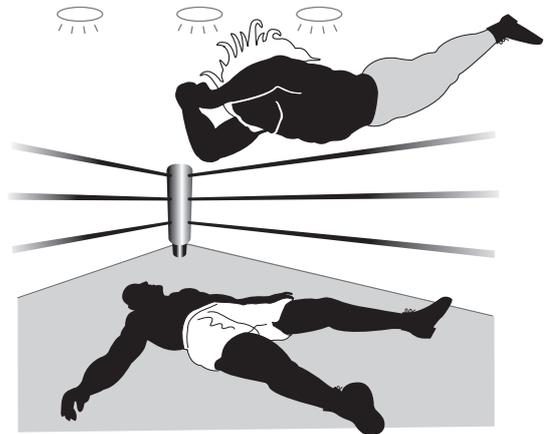
「俺の家族はファンの皆さん」

「見覚えある顔だぞ。そうだ、ラムだ!」。スーパーの惣菜売り場。客にばれ、“伝説の男”の誇りが傷ついた彼はパニックに! 自ら肉のスライサーに触れ、血だらけの手で商品をなぎ倒す…。

「俺にはプロレスしかない」。4月6日、キャシディにも別れを告げ、20周年記念試合の会場へ。追ってきたキャシディが「貴方は独りじゃない。私がいるわ」と訴える中、リングからは「さあ、ラムの登場です!」。彼は「ほら、聞こえるだろ? 俺の居場所はリングだ」。

しかし試合中、再び心筋梗塞の発作が起き、

顔を歪め、胸を押さえる。異変に気付いたアヤトツラーが「もう止そう」と耳打ちするも、必死にコーナーによじ登ったランディ、大歓声の中、最後のラム・ジャムへ…。



心筋梗塞も起こす筋肉増強剤

ステロイドホルモンには、性腺で合成される性ホルモン、及び、糖質コルチコイドや鉱質コルチコイドなどの副腎皮質ホルモン他がある。一般にいうステロイドは糖質コルチコイドを指し炎症を抑える作用があるので、吸入薬や内服薬としては気管支喘息やアレルギー疾患、膠原病の治療に、また、外用薬としてはアトピー性皮膚炎や湿疹の治療に用いられている。

一方、男性ホルモンであるテストステロンには筋肉増強作用があり、この作用を強めたアナボリックステロイドには、タンパク質を細胞に取り込み細胞を強化する作用があるので、医療では骨粗しょう症や慢性腎疾患の治療に用いられる。副作用として血圧やコレステロール、血糖を上昇させ動脈硬化を促進し心筋梗塞を起こすほか、肝障害や多毛症、前立腺がんも起こす。また精神的には攻撃的になり、暴力衝動を引き起こす。

格闘技や短距離走選手は、以前はアナボリックステロイドを服用することで筋肉を増強させ好成績を得ていたが、薬物使用による勝利は競技の公平性を欠き、心筋梗塞などの危険性もあるため、現在では競技選手の使用は禁止されている。しかし、プロレスなどのエンタテインメントでは規制がまだ緩く、死亡例が後を絶たない。成長ホルモンやインスリンにも筋肉増強作用があるので併用されるが、筋肉増強剤は危険であるので使用すべき薬ではない。

監修

結核予防会 新山手病院
生活習慣病センター長

みや ざき しげる
宮 崎 滋